

## 最後の未完詩

——キーツ『鈴つき帽子』について——

松 浦 暢

### (一)

人間はたったひとりで、おのれ自身のほかには、もはや誰もいない状態で、恐ろしい対決に身をさらさねばならない。対決にというのは、その孤独が単一の個体の孤独ではなく、その中に無数の個性を含むものだからだ。

アルベール・ベガン<sup>(1)</sup>

まったくの孤独の状況のなかで、芸術家が自己の問題点をふかく真摯に追求するとき、その問題点はもはや個人の

ものでなく、他の同胞にも通じる普遍的なものになる。自分自身の感情、欲望、あこがれ、恐怖、生きる目的の模索、新しいテーマや手法の実験——なんてあれ、一人の人間が孤独のなかで懸命にもとめる追求は、すべての人間の共感をよび、それは単なる個人の夢や神話をはなれて、人間全体に共通の普遍的な追求となる。キーツ晩年——つまり23歳のときのスペンサー体のお伽話『鈴つき帽子』は、形式とは裏はらの強烈な風刺詩であり、まさにこうした普遍性をもつ作品といえよう。キーツの作品中、最後の意欲的な断片<sup>フラグメント</sup>(全84節)である。考えてみれば〈喜劇的な妖精物語詩〉とか〈模擬英雄詩<sup>エピック・ヘロイック</sup>〉あるいは〈バールスク風の風

刺詩<sup>(3)</sup>とかよばれているこの作品ほど、批評家に無視されつづけた作品はめずらしい。例をあげると「無価値で……不運な未完の風刺詩」(ジョーンズ)<sup>(4)</sup>、「弱くて退くつな社会風刺」(コルヴィン)<sup>(5)</sup>、「まったくキーツらしからぬ、たんに知的で機械的な作品」(ロセッティ)<sup>(6)</sup>、「この天才に本質的にふさわしくないテーマの取扱い」(セリンコート)<sup>(7)</sup>、「妖精と魔法の構成は、主な目的をあいまいにしている」(ヒューレット)<sup>(8)</sup>と、さんさんである。どうやら詩人の大略血まえの冬の数ヵ月に書かれたこの作品は、キーツが未開拓の分野に挑戦して、あえなく失敗したといわんばかりである。好意的な批評は、「退くつからほど遠く、きわめて独創的<sup>(9)</sup>」とみるローウェルをはじめ、比較的詳論をしたギティンズなど二、三にすぎない。

この不当な批評の原因は、はっきりいって、この詩の制作年代の不明、ルーツの複雑さ、作品構成上の謎、テーマや手法についての批評家の誤解など、複数の要因があげられよう。精査してみると、この詩はたんに妖精と人間の<sup>(10)</sup>「食いちがい恋物語」ではなく、異色の作中人物をとおしての人間社会の偽善、ごまかし、非条理への痛烈な風刺、ランブーンであることがわかる。しかも詩人の嘲罵は、他者だ

けでなく、詩や名声や愛にあこがれて挫折した自己へのセルフ・パロディになっている。そのうえ、さらに重要なのは、この詩の創作の時期と、その改訂の時期がほぼ同じである『ハイピアリアンの没落』との表裏関係の存在することである。『没落』が社会における詩人の目的をもとめての形而上学的な遍歴の夢物語だとすれば、『鈴つき帽子』は妖精に仮託した詩人の愛の成就をめざす軽妙な風刺詩というぐあいに、〈夢の構造図式〉が、奇妙に一致している。

この問題はあとでのべるとして、手法的にみてもおどろくべきものがある。ブラウニングに先がけて、いちはやく〈劇的独白〉の形式に似たものを導入したり、古語・廃語を復活させて当時の新語の俗語と併用する巧妙な新味をだしている。語り口も、登場人物の個性をうまくだすように工夫、機知とユーモアに富み、軽快、奔放なリズムをおびている。これが詩人の一生で、もっとも精神的に不安定で、懷疑・焦燥・苦悩に明けくれた時期(一八一九年の冬)の作品だとは信じられないくらいである。この意味で、この詩の精読は、キーツの最後の創作心理や嫉妬の構造の解明に役だつばかりでなく、詩人の詩精神の発展史に、新しいメスを入れることになりそうである。

仕事に熱中した。

まずこの詩の創作事情については、有名なブラウンの回想記事にふれる必要がある。のちの『キーツの伝記・手紙・文学遺稿集』(一八四八)の作者ミルンズへの手紙で、ブラウンは、『鈴つき帽子』が「主として娯楽のために書いた作品で、息抜きに詩のようにおもわれたし、この超自然詩については、なんらはっきりした原則もなく書き始められた」と記述している。はたして「娯楽のため」だけの作品であるかどうか、もうすこし調べるため、成立過程のブラウンのことばを引用してみよう。

たまたま話題が、スペンサー体の、おもしろい妖精詩を書く話になった。かれははじめの数節を書いたかとおもうと、勢いよく書きはじめた。この詩は、ルーシー・ボーン・ロイドの仮名で出版し、タイトルは『鈴つき帽子』か、かれの好む『妖姫』とすることになった。これは、愉快なかれの朝の仕事だった。とても楽々と書き、あるときは夕食まえに12節も書き写したのを覚えてゐる。夜はかれの希望で、ひとり居間に閉じこもり、『ハイピアアン』を「夢」の形に書き直す

これによると、キーツはどうやらタイトルを『妖姫』にすることを望んだようである。The Cup and Bells は、『鈴つき帽子』と訳すべきか、釣鐘状の花をつけた『妖精帽子』と解釈すべきか問題である。もし前者の意味にとるとすれば、これはいわずと知れた中世の宮廷道化師のかぶるロバの耳つき帽子である。しかしふしぎなことに、道化師の登場するのは、この詩の87節だけである。そこでは詩人が道化師の背にのり、王に逃げられた失意の王女に無意味な祝福歌の詩をうたっている。全体構成からみて重要な部分ではなく、付け足し部分である。エルフィン王をフールにするには、道化の身分がちがいきすぎるし、王の性格が複雑でかけはなれすぎるくらいがある。この詩が妖精詩である点からみて、小人の妖精が野のベル形の花をつけた『妖精帽子』とみる方がより適切ではなからうか。キャサリン・ブリグズによると、ブラウン・ドォーフとよばれる妖精は身長18インチたらずで「茶色の上着と、小さい花のベルをつけた茶色の帽子をきてゐる」<sup>(12)</sup>「そうである。この帽子をきると、自分の姿を見えなくしたり、魔法を使える

という。ヘキャップ・アンド・ベルズはそうすると、必ずしもフルの帽子ではなく、妖精の空中飛行などを可能にする「妖精帽子」の可能性がつよい。しかし、キーツがこの題よりも『嫉妬』の題をえらんだのは、『鈴つき帽子』の題の非妥当性を考えてのことではなかったか。ステイリンジャーがキーツ詩集で、この詩の題に『嫉妬』をえらんだのは、内容面からみて肯かれるところである。ステイリンジャーは、ハーバード大学にあるウッドハウス写本W<sub>2</sub>にしたがって『嫉妬——ランベース、チャイナ・ウォークのルーシー・ボーン・ロイド作、妖精詩』<sup>(13)</sup>という正題にしている。従来の『鈴つき帽子』、別名『嫉妬——妖精詩——断片』は、ブラウンの『キーツ伝』にしたがい、ミルンズ（ホートン卿）が一八四八年のキーツ伝（既述）で採用したものらしい。<sup>(14)</sup>キーツ原稿には、キーツではなく別人の筆跡で、『鈴つき帽子』と書きこまれている。この詩のキーツの真意を見ぬけず、へ息ぬきの娯楽詩」とみたブラウンからすれば、無理ないところである。

タイトル問題について、この詩の制作年代についての考証も、重要である。制作年については、三説に大別できよう。①一八一九年十一月〜十二月説（アロト、ローウェル、

ステイリンジャー<sup>(17)</sup>）、②一八一九年十一月〜一八二〇年二月説（フィニー、ペイアー<sup>(18)</sup>）、③一八一九年十月〜一八二〇年一月説（ギティンクス<sup>(20)</sup>）がそれである。①は成立事情をのべたブラウンの記述に準拠したもので、創作期間を一八一九年の終わりの二ヵ月間にしぼったものである。すでに引用したブラウン回想記のこの詩の創作開始期は、ローリンズらによって、大体「十一月」と推定されている。②は、創作時期の終わりを翌年二月のキーツ大咯血に合わせ、四ヵ月間で書いたものとみなしている。③は、キーツが恋人ファニーを頻繁に訪ねた一八一九年十月を起点とし、創作の終止点を、翌年の一月の弟ジョージの帰英の時期と一致させたもの。その根拠は、この一月、へいまさら言う必要もない理由<sup>(22)</sup>で、弟がキーツから大金をまきあげ、アメリカへ持ち帰ったため、詩人が人間性にふかく失望して、詩を中断したからだという。

以上の三説があるが、いま一度ブラウンの回想にかえつてみよう。昼は『鈴つき帽子』を「楽々と」と書き、夜は骨折って『没落』を「改作」していた点から、両詩はほぼ同時期に創作と改作を行ったことが判明する。両詩並行ということになると、どうしても創作の時期を①とする解釈

が有力になってくる。さきに、わたしが両詩が〈表裏関係〉にあるといったのは、その意味である。もし『鈴つき帽子』が、十二月ごろ中断してその後再開されたとすれば終りの時期は訂正されなければならないが、その確証はない。なるほどレノルズへの一八二〇年二月の手紙には「まもなく妖精詩を書き進められるだけ健康が回復し、ノートづくりで、きみを日曜・休日にきりきり舞いさせることを喜んでゐる」<sup>(23)</sup>とあるし、同年六月のブラウンあての書簡にも「ほどなく〈ヘルシー・ボーン・ロイドの詩〉にとりかかります」<sup>(24)</sup>と、キーツは詩再開の希望はのべている。しかし一八二〇年一月以降に、この詩を継続した証拠はない。ギティングズは、この詩の最後の六節は「へま」<sup>(25)</sup>と異なつた趣がある、と、キーツがケンティッシュ・タウンで「書き加えた」ものと類推しているが、それはあくまで類推の域であるものではない。

いっぽう『没落』は、一八一九年九月のレノルズおよび弟あての手紙からもわかるように、ミルトンの色彩の濃いため中断された。ミルトンの英語は「美しい華麗な好奇心」<sup>(26)</sup>として残すべきだが、〈英語の墮落〉<sup>(26)</sup>につながるラテン語法があり、その点ガリシズムにも汚れてないチャッ

タートンの英語こそ規範とするべき〈純粋な英語〉<sup>(27)</sup>で、その古語はいまも生きていると称揚している。その素朴な音楽美ある言語を、キーツは後期の作品に生かそうとしたのであろう。『没落』が、こうした意図をふんで一八一九年十一月〜十二月に改作されたことは、引用したブラウンの回想にあるとおりである。

『鈴つき帽子』と『没落』が、たがいに表裏関係にあり、同時進行したとする説は、さらに二つの例で、立証できそうである。

ひとつは『鈴つき帽子』の第51節の余白頁に書きこまれた、これまた同時期に書かれたとおもわれる「この生きてゐる手」という短詩を、通じてである。

いま暖かく血のかよい、しっかりとものを  
つかめる、この生きてゐる手が、もしも冷たく  
なり、墓場の氷の静寂につつまれると、

おまえの日にまといつき、夜な夜なおまえの  
夢を凍らせるだろう。やがておまえも  
死をねがうまで。そうすれば ふたたび

この血管に、血がながれはじめ  
おまえの良心も落ちつくことだろう。そら

この手をみろ、おまえの方へのびてゆくぞ。

この嫉妬におかされ、愛に狂い、恋人を呪って、その夢にとりつく詩人の恐ろしい死の手のイメージは、嫉妬に狂う点で、『鈴つき帽子』のエルフィナン王に通じるし、いまへ血の通う手へが墓場に入るという連想で、『没落』のそれにも通じている。

ここで話す わたしの夢が、詩人の夢か

狂信者のものかは、ペンをもち血の通うこの手が

墓に入るとき、おのずと わかることだろう。<sup>(28)</sup>

もっとも、『没落』であたたかく血の通う手は、愛に狂った呪詛の手ではなく、真摯に精神的救済をもとめんとする詩人の苦闘の手であるが、ともに死のかげをおびた手で類似している。さきの短詩が『鈴つき帽子』の余白に書かれて、嫉妬の内容で一致しているため、両詩の連関はあきらかである。短詩が〈将来ある劇詩に用いる予定の一節〉<sup>(29)</sup>とは考えにくい。しかも、生きている手が墓に入り死を迎えるという発想で、『没落』と酷似している。この短詩を

媒介として、『没落』と『鈴つき帽子』が、結びつくわけである。

第二の例証は私見だが、まだどの学者も指摘していない新資料、W・ベックフォードの怪奇ロマンス『ヴァセック』(サミュエル・ヘンリー英訳)(一七八六)にみられる。バイロンも敬愛したといわれるこの幻想作家22歳の作品を、キーツが他のオリエンタル物語とともに、愛読したことは十分に考えられる。その影響とおもわれる箇所が、『鈴つき帽子』と『没落』の両作品にみられるからである。アッバス王朝第九代の教王<sup>カリフ</sup>のヴァセックは、癩症で色好み、へアダム以前のサルタンの財宝を<sup>(30)</sup>もとめて、死の谷をわたり、野獣に襲われながらもへ額の黒檀のように濃<sup>(30)</sup>い異教徒のインド人の家内で、目的の大魔王の地下宮殿に行き、生前の罪業の酬いとして、そこで死を迎える。

『鈴つき帽子』では、妖精の国王エルフィナンが同じげしい気性の持主で、議会の圧力でいやいやながら妖精の王女ベラネインを王妃に迎えることになる。迎えの一行はゴビ砂漠をこえ、火焰の山をへて、怪獣に偵察されながら帰国する。いっぽう王は、黒人奴隸イーバン(これは『ヴァセック』の色の黒いインド人と一致)に命じて予言者ハムをつ

れてこさせ、魔法の本の手引で、花嫁到着と同時に、かの女と別れ、アングルランドの愛する人間女バーサーのもとへと城から去ってゆくが、話の結末はない。『没落』の主人公は、夢想家の卑小な自己をこえて、詩人の真の解脱救済をもとめ、女神モネタの神殿へ通じる階段をのぼる。そして死の一手手まえて「死んで甦る」という転生の秘義を悟るのである。

この「階段」の原型イメージは、プラトン哲学の「美の梯子」の形而上学的ふくみや、ダンテ的な煉獄の階段の意味もあるが、それに『ヴァセック』の王の高塔へ通じる1500段の大階段や魔王の宮殿のそれを加えねばなるまい。ヴァセック王の階段は「人間が蟻のように、山が貝殻のように、街が蜂の巣のごとく見える」<sup>(31)</sup>高塔への上昇階段であるが、魔王<sup>ニフリス</sup>の宮殿への階段は下降階段で、ヴァセック王を死の破滅へと追いやる。『没落』では、たんなる空想家を、洞察力をもつ真の詩人へと昂める上昇階段である。こうしたちがいはあるが、運命の転機をあたえる階段という点で、一致している。

『ヴァセック』の王城の第一宮殿の「もつとも絶妙な山海の珍珠」<sup>(32)</sup>と噴水より湧きのぼる美酒、異教徒から王のも

らった心の渇きをいやす「赤と黄の液体」<sup>(33)</sup>と、サマラちかくの山麓の楽園の情景は、『没落』のカメに入った詩のテーマの源となる「透明な液体」<sup>(35)</sup>や、異教的でゆたかな庭園の饗宴のイメージに似かよっている。『ヴァセック』で子供の命をのみこむ「巨大な暗黒の深淵」<sup>(36)</sup>や千仞の谷、それに通じる「黒檀の門」の不吉で暗いイメージは、『没落』のタイタン族の首領のサタンの悲愁の王国の「死の谷間」<sup>(37)</sup>、そよとの風もなく枯葉がつもり、谷川の音なく流れる死の世界や、永遠に閉じた「暗黒の東の門」<sup>(38)</sup>を、おもいださせる。

『ヴァセック』と『没落』の類似は、こうした情景的な符合がおおいが、『鈴つき帽子』では、むしろ登場人物の性格的類似が主点となっている。とくに教主<sup>カリフ</sup>のヴァセックとエルフィン王は、その旺盛な好奇心、女好き、気性はげしさで酷似している。

### (III)

インドの奥地、ひんやりしたハイダスビス川のはと、  
エルフィン王のかたい統治のもと、妖精の都が

中空にゆらめき、浮かんでいた。いずこでも

この王の、人間女、美しい乙女への色恋を

知らぬものはいなかった。好みの女の唇はふくら、

柔手はすんなり、ふさわしい形と美しさをもち、

熱烈でかわらぬ王の切ない求愛をそそった。

王は影のように、はなやかな女を愛したものの、

影にすぎない妖精は、お気に召さなかった。

これは『鈴つき帽子』の冒頭の一節である。ここでエル

フィナン王は、〈影〉と表現される空霊の女よりも、影を

こえ実体をもつ女、暖かい官能的な肢体の人間の美女、パ

ーサへの熱愛ぶりを暗示している。〈影〉はあくまでも影、

「実体の幻影、つかの間のほかない命の空霊的な存在」(O

ED)にすぎない。それは、たんなるエルフィナン王の

〈愛すべきジョーク〉からでたことではなく、キーツは

第三節の〈影〉と同様に、ここで〈影〉をベラネインをふ

くめた同類の妖精女の意味に使っている点に、注意すべき

であろう。たとえ、妖精の王が、人間の女を愛すること

が、妖精国の〈法の禁じた罪〉であり、<sup>サンデペスター(40)</sup>〈妖精教典〉を逸

脱するものであっても、僧侶が非難し、風刺し、泣きわめ

いても、エルフィナン王は、とにかく人間女を溺愛したの

であった。こうしたエルフィナン王は、『ヴァセック』の  
女色に溺れ、快楽はあくことを知らなかったヴァセック教  
主と一致している。またエルフィナン王のはげしい気性、  
自分の色恋の邪魔をするものを痛罵し、その怒りのはけ口  
に罪人を処刑する非道さは、ヴァセックの自説に反対する  
ものを投獄し、ストレス解消に、容赦なく死刑にする悪逆  
無道と同質である。

怒りのあまりゆがんだ愛は、よくはけ口を求める。

王は、すつくと立ちあがり、床をならし呼鈴をおして、

死刑執行書に署名するから、すぐもってこいと

命じた。どこかで死のあらしが落ちたが、あわれ

重罪人のおおくは、死人に口なしだった。

『鈴つき帽子』第20節<sup>(41)</sup>

教主のはげしい性格は、かれを愛欲にとどまらせなかった。

学者との論争を好んだが、論駁することをゆるさなかった。

……抑えられない人間は牢獄にぶちこみ、その血を冷やさせ

た。……論争に熱中する相手を、教主に反対するように仕向

け、そのお返しは、処刑であった。

『ヴァセック』<sup>(42)</sup>



さらに『鈴つき帽子』と『ヴァセック』の奇妙な一致点は、前者のじつに克明な時間的推移によるクラフティカントの客観的日記の描写部分と、後者の類似心象のあいだにみられる。それは、クラフティカントが花嫁を迎えに行つて帰国するさいの深夜の空中飛行に関する部分である。具体的にいえば、火山の大噴火(74節)、グリフィンの来襲の恐怖(76節)、流星の落下、茶毘(だび)の山の異臭(74節)などが、それにあたる。

はるかかなた おおいかぶさる闇のなか、  
巨大な山が(ふしぎな話だが)その硫黄に  
やけ焦げた山頂より、煙のターバンをまいた  
血のような扇形の焰、矢のように走る火焰の  
炎を噴出しているのをみた。煙はあの  
永遠(だひ)の茶毘の山から、たえまなく、くろくろと  
いつまでも異臭を放っていた。ほとんど  
息もつけない 重苦しい風にのつて。

『鈴つき帽子』<sup>(43)</sup>

この異臭をだす〈茶毘の山〉のイメージは、『ヴァセック』の〈茶褐色の蒸気をだして燃えあがるミイラと毒酒の

青い炎〉からふきでる〈窒息しそうな悪臭〉<sup>(44)</sup>からきているようだ。『鈴つき帽子』では、このあと王女の一行に凶運のしるしの流星が落ち、人々を殺傷し、血類をくだき(これには、ややコミカルな響きがある)、張り骨のある王女のカートを焼きこがす。怖れ興ふんした乳母のコラリーヌが〈三度手を打ちならす〉<sup>(45)</sup>シーンが登場する。この異常な動作は、妖精国イメウスの奇妙な習慣だとクラフティカントは説明しているが、リックスによれば「キーツの大反発をしたバイロンの指鳴らし、生意気な尊大さ」<sup>(46)</sup>を指すものとなる。しかし、乳母の動作とバイロンのそれとの直結は、いささか唐突な解釈のようである。むしろ、その原型は、同じ女性であるヴァセックの母で予言者のカラシスの手鳴らしに求めるのが妥当だろう。

その茶毘はうず高くなり始めて、3時間のちには、20キュービッドの高さになった。カラシスは服をぬいで下着になり、興ふんのあまり、手を打ち鳴らした。

『ヴァセック』<sup>(47)</sup>

カラシスの女子言者的な狂的な振舞いは、ヴァセックの

母后としての王族の気まぐれ、奇矯さとも関係がある。侍従を相手に、チェス遊びをいらいらしながらする条も、『鈴つき帽子』で、王女ベラネインが乳母相手にルール違反しつゝ、トランプ遊びをする気まぐれさと一致している。

こうした、たび重なる構成や情景、登場人物の類似点から『ヴァセック』のキーツの二作品『没落』、『鈴つき帽子』への影響は無視できないようである。しかも『鈴つき帽子』は、『ヴァセック』とおなじように、インドを主な舞台にした東洋風エキゾチズムの背景をもっていることも共通点である。これに付随してのべれば、主人公の占星術的興味、気まぐれな直情性も問題になろう。星占いのハムをエルフィン王が愛する人間女バーサに会うために重用したように、ヴァセックも、みずから占星術に凝り、塔から遊星の運行を監視するかわら、予言者の母カラシスの声に耳をかたむけ、行動する。

『鈴つき帽子』のなかの空中飛行の設定、錬金術、天文学の用語——たとえば〈生命の水〉(33節)、〈硝石〉、呪文をえがく〈ヘチョーク〉、〈黄道帯〉(33節)、〈ゾロアスター教典〉(2節)、〈水銀〉(69節)の多用など、これを物語って

いる。ヴァセックもそれらに興味をもち、王城の塔で占星術の奥義に達しようとして異教徒の声にひかれ、〈星の約束した宝〉をもとめて炎の地下宮殿へ旅をつづける。財宝がえられるのなら、回教の信仰をすてても魔王に魂を売り忠誠をちかう。しかし、そこに待ちうけているものが、永遠の恐ろしい破滅と死であることは予見できない。いや占星術により、ある程度、予見できても、さらに強大な欲望に目がくらみ、予知の洞察力が鈍っているのだろう。エルフィン王の場合は、むしろ財宝をすててまで、自分の愛情を貫くために時間的・空間的に超越し、愛する対象と同化しようとするのである。しかし、妖精と人間という相容れない存在の間の深淵をいかに超えるかという懊悩、迷い、嫉妬、怒りの感情の氾濫がある。妖精による空中飛行の設定も、この深淵をこえる一工夫であり、精神分析学でいう〈抑圧された官能的欲望〉をしめす飛行の夢でもある。エルフィン王が、軽妙さの本質的象徴である〈翼〉をもつ妖精であることは、王のはやる魂を肉体の形骸からはなし、鳥の体軀よりも、より迅速に人間女バーサのもとへ運ぼうとする含意が、コミカルな一面とともにあることが、うかがわれる。この意味で優美なカーブをえが

き、心のヴェクトル的な特徴をうまくしめしているのが、この空中飛行の夢<sup>(50)</sup>であらう。『鈴つき帽子』の解明の鍵をにぎっているのは、このエルフィナン王の複雑な性格と行動の分析にあることは、いうまでもない。

#### (四)

妖精王エルフィナンが、〈影〉にすぎない同族の妖精女をきらい、美しい人間女バーサの暖かい官能愛にあこがれる気持は、すでに引用した第一節にも示されているとおりである。これは、ふたたび第19節で、高地人イメウスの妖精の王女ベラネインとの結婚を迫られて、〈冷たい薄のろの妖精女〉とのしり、対照的にバーサへの思慕をさらに明確にうたいあげている。

おそろしいことだ！　ちえっ！　くそっ！　どんな醜い  
おてんば娘を、連中はおれの花嫁につれてくるだらう。

ああ！　おれの倦みはてた心は、身体の中に沈みこむわい、  
ちかいうちに冷たい薄のろの妖精女と結婚するさだめ

だと思ふと。ああ！　悲しいことだ！　あらゆる

人間女のなかで　いちばん美しい女よ！

愛しいバーサよ！　おまえのかぐわしいドレスの  
ひだのまわりにそつと忍びより、おまえの瞳にキッスし、  
おまえの捲毛のひとつひとつを数えて、なぜ悪いのだ。<sup>(51)</sup>

こうした王の恋愛心理を理解するには、キーツがひろく人間——いや女性について考えていた二つの対極的な氣質をおもいかえす必要がある。いっぽうでは、男の目が磁石のように吸いつけられる雌豹のような妖しい美をもつ世俗的で、芝居じみていて官能的なタイプの女（たとえばクレオパトラやカーミアン型）に惹かれるとともに、他方では、<sup>イリシッ</sup>霊<sup>アル</sup>的で、精神的な、心に安らぎを与えてくれる弟の嫁となつたジョージアナのような広量なタイプの女性の両方に、魅力を感じていた。しかもキーツは、前者のような女性によって墮落させられ、後者の女性に救済されたいという男としては虫のよいことを、心底のぞんでいた。<sup>(52)</sup>『鈴つき帽子』についていえば、さしずめ前者がバーサ（人間女）、後者がベラネイン（妖精女）ということになるが、バーサは、むしろ両者がかね備えた理想の女性像、恋人ファニーの変身とみてよい節もある。

ともあれ、エルフィナン王は〈王の情炎〉を消し、妖精

女との結婚を強要する〈反逆者〉への憎悪をつのらせる。16節から18節までの議員、僧侶、大蔵大臣、A公爵、B子爵らの貴族への悪罵、呪詛の独白がそれである。これは、さらに、エルフィン王よりハムを迎えにゆく命をうけた黒人奴隸イーバンの〈老いぼれ御者〉への痛罵の連鎖反応を、ひきおこしている。

「議員どもに一泡ふかせてやるぞ」王は叫んだ。

「反逆者どもの名には、しるしをつけ、おれに逆らう議員めをたじろがせ、やつらが恥じ入るまで

王の情炎を消そうとすると、どうなるかを、

思い知らせてやろう。牧師たちまでが悪事に

加担するとは！ やつらまでもが、この手のこんだ

計略に加わっているとは！ おれは王ではないか。

王冠をかぶっているのか。エルフィン王よ、さあ

行つて首をつれ、さもなきや溺死しろ」

やつらに一泡ふかせてやるぞ！ お堅い大蔵大臣め、

やつの息子は、司教職につかせないぞ。

それからバルフィオーの老いぼれの甥だが、

やつの演説は、頭にきたといつてやり、

フアラリックは、陸軍大佐に昇進させてやろう。

モラリストで着飾った忍び足の侯爵には、

後払いで、居酒屋にたつぷり入りびたらせ、

下院議長のもたいとこの叔母は、

王女つきの侍女にしてやるものか——ぜったいにな。

A公爵は遠ざけ、やつの弟とは手を切り、

やつの長男には、ガーター勲章はやらす、

やつの妹や母とも、口はきかないぞ。

B子爵には、逃げまわる生活をさせてやろう。

しかし、どうすりゃ、おれを苦しめてやまない

やつの声を聞かずにすむだろう。どうすりゃ、

世の君主を道化師と考えやがるあの頑（53）くな

薄のろ、生意気な借金取り、下劣な平民野郎、

ビアンコパニー卿を、やつけられるかなあ。

『鈴つき帽子』のテーマの一つが、〈風刺〉であること

は、まちがいない。風刺をほめかすキーツ自身のことば

も書簡にみられる。「もしもヘルシー・ボーン・ロイド

の詩」(ルーシーは、パイロンのファンの女性で、その仮名で

『鈴つき帽子』をキーツは書いている)を出版するようなこと

になれば、人の胃をチクリとさせるような微妙な部分があることだろう<sup>(54)</sup>」と風刺の棘をのぞかせている。王や貴族の罵倒は、すでにこの手紙よりもさきに、ジェイムズ一世やバリー卿批判となつてゐることも衆知のとおりである。

「ジェイムズ一世の風さいは〈婦人抑圧協会〉の面よごしで、この上もなく浅ましく、ちっとも感情を抑制してないようだ。それに老いぼれのバリー卿、この男はしみつたれの高僧、政治家の貯金箱で、その様子ときたら福音書の機智でひじ鉄喰つたパリサイ人的偽善者のようだ。それからジョージ二世陛下<sup>(55)</sup>、この方は痛風と癩しゃくに悩んでゐるバカなヴォルテールというところだ」。

引用の手紙といい、詩の八つ当たりのともみえる悪口の裏には、キーツの当時の無能で墮落した政治家や僧職者、特権階級への憤りが感じられる。と同時に〈おれは王ではないか〉という語調には、王としての自己の無能力・無適格性を嘲笑する自虐的で、自己叱咤的なセルフ・パロディもみられる。この詩を書く半年まえ、すでに「こよい、なぜ嗤つたか」のソネットで、つとにキーツはこの自虐的アイロニーを露呈してゐる。

こよい、なぜおれは嗤つたのか だれにもわかるまい。

いかなる神も、また辛らつた応答をする悪魔も

あえて応えるものはいない、天や地の底からも――

そこで、すぐさま、おれは自分の心に自問する――

心よ！ おまえとおれは、ここで悲しく孤独だ。

応えろ、なぜ、おれは嗤つたか、ああ、人の世の苦しみよ！

ああ闇よ！ 闇よ！ 永劫におれは悶えねばならぬ、

天と、地獄と、おのれに たずねるために！

なぜ おれは嗤つたのか、この身の借物なのは わかつてゐる。

そこで至福の域にまで 空想をのぼしてみるのが、

その気なら、この夜ふけ、おれは死にはて

この世の華やかな旗が千切れるのが、見とどけられよう。

詩と、はまれと、美、たしかに、これは強い魅惑だ。しかし

死こそは、無上の魅力だ――命の高い代償が死なのだから。

キーツの7年足らずの短い詩的生涯をふりかえつてみると、終生この詩人には〈詩〉、〈名声（はまれ）〉、〈美と愛〉への希求があったが、この三者は、近づくともえて遠のき、詩人の焦燥、懊悩のルーツとなつてゐる。また三者は、ときに相互矛盾をおこし、この軋轢より詩人の苦悩

は倍加し、ついに、上記のソネットを書いた段階（一八一九年三月）で、絶望的な強<sup>わづ</sup>いをもらし、精神的な荒野をさまよい、死を迎えようとするのである。このあたりは拙著『キーツその夢と現実<sup>(56)</sup>』で詳述したので、ここではくどくどしく説明はしない。〈詩〉、〈名声〉、〈愛〉よりも、いまだは〈生命の高い代償〉としての死の魅惑をたたえ、受容しようとする。すでにキーツは、一八一四年、もつとも初期の詩「死」のなかで、ふつうの詩人のように、ほのかな詩へのあこがれという形ではなく、現世の生命が、たまゆらにすぎて死とつながる無常性と、おのれの夭折を予見してうたっている。

死は眠りなのか、人生が夢にすぎず

よろこびの情景も幻<sup>まぼかし</sup>とすぎるなら。

ほんにこの世のはかない快樂も、夢のようなもの、

なのに、ひとはいう、死こそ最大の苦痛だと。<sup>(57)</sup>

死はキーツにとって、二つの存在を分割する事象ではなく、現世と対照的にあるとともに、苦悩の世の連続として〈生〉と密接に結びつくものであった。苦悩とよろこびの人生が〈夢〉のように、実体があるようにでないものだとする

れば、死もまた、恐ろしい実体であるとともに〈眠り〉、煩惱の生の苦しみをたち、永生へとつなぐ〈安らかな死〉でもあった。ここに〈安らかな死〉というオクシモロンの表現が生きてくるわけである。死は永生の神のもとにかえるというワーズワスのな永生観よりも、もつとキーツの永生と死の概念は、自己の経験に直結した即物的・個性的な理念であった。この背後には「青春とは不滅の属性であり、青年は自己の死を予見できず……存在とのつかのまの結びつきこそ解けることのない永遠の結合だ<sup>(58)</sup>」という青年特有の錯覚が、ハズリットのように少しあったのかもしれない。いや洞察力にたけたこの詩人は、生と死の相關関係をだれよりも鋭敏に知り、つねに精神的に変容し、古い自己を殺して、新しい自己に脱皮する努力を繰り返かえしている。『没落』では、主人公が夢想家<sup>ドリーム・メーカー</sup>であった過去の自己を批判し、ある意味でキーツ自身の分身でもあるモネタに仮託して、痛烈な自己批判を行っている。詩人とモネタの女神のダイアログは、この意味でキーツ自身の内部の相せめぐ声で、両者の対立をとおして詩と詩人の本質を問うている。真理の祭壇へのぼる階段の手まえて死の麻ひにとらわれた詩人は、他者への愛に生きるといふ悟りをえて、死

から甦るわけだが、こうして死の意識的受容から、生の再発見への転生の秘義に達するのである。『鈴つき帽子』でも、エルフィン王の自嘲と自己批判は、かなり強烈である。おなじように議員、大臣、貴族など他者への痛罵には、当時の皇太子ジョージ殿下や文壇の寵児であったバイロン、ハズリット、ハント、ラムなどへの風刺がこめられていることは、批評家の指摘するところである。エルフィン王のモデルがだれかという問題とも、密接な関係がある。『鈴つき帽子』<sup>(39)</sup>にでる「人喰い虎オルガン」の使用から、フィリス・マンの説くように、王のモデルはイギリス軍との闘争に意欲的だった、回教君主のタイプ・サルタンかもしれない。裏切りと残忍さをもつ怪物、恥しらずで顯示欲の強かったこの君主の愛用した、犠牲者の悲鳴と虎の吼り声のである「人喰い虎オルガン」を、エルフィン王も愛用する恐ろしい王でもあった。

あの低い吼り声は、あなたの手相術が  
どう判じようと、皇帝のおもちゃ、いちばん  
美しい玩具、人喰い虎オルガンからだ。<sup>(40)</sup>

それとも、一八一六年代の悲惨なイギリス社会の状況を

無視して、ぜいたくさとエクセントリックな振舞いでヨーロッパ上流社会のひんしゆくを買った英国皇太子か、キーツのちに強烈に反発したバイロンか、既述のヴァセック王か、決定的モデルについては、まだ定説はない。問題はむしろ、モデル云々よりも、この詩のテーマの再検討であろう。テーマのひとつの「風刺」については、すこしふれたが、その風刺と、もうひとつのテーマ「嫉妬」の底辺構造を知るには、当時のキーツの絶望的な健康状況——いや、それよりも悲惨な精神状態の把握が必要であろう。

## (五)

まだ比較的健康だった一八一九年の八月、キーツは「詩」について大きな抱負と野心をいだいていた。

ぼくの野心のひとつは、近代劇作品で、キーンが演劇の舞台でなしとげたと同じような大革命をひきおこすこと、いまひとつは、まだるっこい青鞥作家的な文学界をひっくり返してやることだ。2〜3年のちに、この二つのことができれば、悔いなくこの世におさらばできるわけで——友人たちも、ぼくの墓のうえでクラレット酒をがぶ呑みできるというわけさ。<sup>(41)</sup>

「大革命をおこすような近代劇作品」というのは、この手紙のすこし前にでてくる「ある悲劇を4幕書き終えた」とある『オットー大帝』のことにちがいない。しかし、この劇詩は、はじめドルフリー・レイン劇場で受理されたものの上演されず、ついでコヴェント・ガーデン劇場からも拒否され、世間的な成功が収められず、詩人は深い失望を味わった。神聖ローマ帝国の王子ルドルフが部下のアルバートに欺かれ、花嫁オーランテに姦通されて狂乱し、怒りと呪いのことをば吐く条に、この劇の悲劇性が暗示されているようである。

さあ墓碑銘をこう彫れ、やつらの告白として、

おれの地下に眠るとき、この王子は欺かれたまされたが、

その恨みの灰より、火焰の竜にもまさり甦り、

浄化する紅蓮の焰で、その不名誉を焼きつくしたと。<sup>(62)</sup>

『オットー大帝』

この劇を書いた理由は、右の野心のほか、金策のためであった。ここ数ヵ月、詩人は極度に金に困っていた。弟ジョージが帰英して700ポンドの大金を持ちかえり、手もとには100ポンド足らずが残るのみであった。あちこちに借金を

申しこみ、かれ自身も生活のために、ジャーナリスト、本屋、茶商、船医など、いろいろの職業につくことも考えたくらいである。このころ恋人と婚約したものの結婚のメドはたたず、健康は急速に衰えた。こうしたとき、最後の力をふりしぼって、バイロンの『ドン・ジュアン』の華麗な成功にあやかり、妖精の登場する風刺詩の創作に挑戦したのが、『鈴つき帽子』であった。しかし、バイロンのように根っから冷たい風刺家でなく、良きにつけ悪しきにつけ、世俗性を身につけていなかったキーツは、そのかくれた暖かい人間性に邪魔されて、軽妙な風刺性を乾いたタッチで表現することができなかった。その人間性のゆえに、かえって激しい憎悪にもつらなるような風刺の棘が、でてくるのは、やむをえなかった。

世俗的成功と名声への断絶は、無意識的にバイロンや他の成功した詩人たちへの風刺と呪詛にかわってゆく。しかし、バイロンへの軽蔑は、一理ある点もあった。それは人間性の高尚さや厳しゅうな生の事実を「嘲笑し、ほくそ笑み」<sup>(63)</sup>笑いのものにする態度を、キーツは嫌ったのである。例えば、イタリーへの船旅でビスケー湾を通過するとき、読みふけていた『ドン・ジュアン』を、キーツは床に投げ



すてた。その理由は、嵐のシーンの描写が、人間のもっとも厳しゅうな心を傷つけるように書かれていて、悲惨の情景を笑いのにしているとキーツが感じたからである。詩人の表現によれば人間の心に加えられた、きわめて悪魔的な試み<sup>(64)</sup>だったからである。高尚なるべきものを、おどけたものにするバイロンの悪趣味が、耐えがたかったのである。《詩》と《名声》への絶望からくる悲哀と懊惱は、たんに《病氣の精神への侵食》<sup>(65)</sup>以上に悲痛な苦悩であった。この詩を書きはじめたころの弾む期待「ちかいうちに、ある良い詩を書くことにした。もっともすばらしいものは、もっとも魅惑的なもの<sup>(66)</sup>のたしかな保証だから、空想力を解放して自由に書こうと努力した」という明るい期待は、しだいに、色あせていった。

このすこしあと、ライスに書いた手紙には《真実の話》といて恐ろしい話を紹介しているが、実は夢魔にうなされながら当の御本人の書いた創作だろう。ある若夫婦がいて長い徒歩旅行にでかける。途中小川にぶつかって夫は妊娠していた妻を背負って靴をぬいでわたる。そのとき澄んだ川水のなかで夫の脚が美味しそうにみえたので、妻はその足の肉を二度にわたって要求する。夫はたぶん腹に双子が

いる故だとももって、ナイフで肉切れを切りとってあたえる。しかし、三度目を要求したとき、夫は《この恩知らずめ》と叫んで妻の腹を切り裂くと、その胎内に三つ子を発見する。うち二人は口を閉じ満足そうにねていたが、三人目の子は口と目をおかつと開けてにらんでいた。へまさか、こんなことが！と男は歎息して旅をつづけたという恐ろしい挿話である。『鈴つき帽子』の作詩期間に、こうした話のあることは、まったくの偶然なのだろうか。弟のジョージあての手紙にも、「この一年ほど、わたしに悪かった年もないし、わたしの詩才を鈍らせたこともなかった」と告白し、おなじ手紙のなかで、ライスのわいせつな押韻詩を引用し、売春婦の歎きに共感しているような節もあるのは奇妙である。

わたしや二つのボックスにかかって恋人に  
逃げられたわ。梅<sup>グレイト・ボツクス</sup> 毒と<sup>スミル・ボツクス</sup> ほうそうの  
ちがいだけだったのに。ほうそうで、あばた  
だらけになったけど、梅毒では同情もされなかったの。

このようにデフォルメした異常な精神状況は、純粹詩人のキーツにそれまで見られなかった現象だった。その屈折

した心理のため、キーツは同一対象に対しても正反対の反応をしめし、共感と反発をくり返すようになる。もともと、ものを定義するのに規定した概念をもたず、つねに新しい角度からものを見直すという習性のあるキーツ、へ慎重な固定した人間よりも軽そつで流動的な人間<sup>（19）</sup>になることをのぞんだ詩人、ものの矛盾した二面を同時に洞察した天才にしてみれば、なんのふしぎもないともいえる。それをしんしゃくしても、なお、この時期のキーツの同一物への矛盾した両極端的な対応には、おどろかされるものがある。その理由の一端には、さきにのべたように、悲劇にかけた一大野心が、くじかれたことがあるのは否めない。「この悲劇の発行を待たせて。いやダメだ。東西南北いづれを向いても、劇作品以上に不確実なものは、なにひとつありえない。いったい何ヵ月待たねばならぬのか。……まったく詩というものはわからない」。上演を一寸刻みに待たされ最後には拒否される苛立たしき、焦燥をぶちまけている。こうした不安定な状況から、自分の詩才に懐疑をいだいたり、自分を「死んだ間ぬけ」にみたてて自嘲気味になったり、他の賢い作家のように半知半解でも平気で喋る図々しさを身につけねばと自戒をしてみたりする。この

時期の著しい共感と反発の矛盾した姿勢は、一般大衆、名声、特定人物、自己、ときには恋人にさえ相反する二面をみせつけるようになる。大衆はきらいだが、人類は好きだという区別をつけるときもあるが、場合によると、詩人は夢想家的逃避をやめて「巷の人間<sup>（20）</sup>」と共存し、苦楽を共にするべきだともいつてのける。

対バイロンの態度も、はじめのころの共感と同化——たとえばミラー嬢の舞踏会に招かれたら、靴下に、ものにした女の子のイニシアルをつけ、紫色のシルク・ハットをかぶり、颯そうと登場しよう<sup>（21）</sup>という伊達男ぶりには、バイロンと同化した自分の姿を想像している。しかし、『鈴つき帽子』で、エルフィナン王が王妃にいう別れのことば「へさらばじゃ、あわれなベルよ」ではじまる四行は、おおくの批評家の指摘するように、バイロンが妻アナベラに別れてのちあえた詩「訣別」とおなじ詩行である点より、バイロンを風刺・パロディ化したものと断じてよい。バイロンへのこうした侮蔑は、個人的嫌悪をとおこして、やがてリックスのいう「全思考、感情体系の衝突」といってよい段階にまで達する。

こうした反発と侮蔑は、裏がえしてみると、意外に両詩

人が同質性をもっているための同極反発ということが、いえるかもしれない。個性によって詩を創作しようとした点  
は同一だが、バイロンは個性に沈潜してますます個性的になる詩人だが、キーツは個性を拡大して自分の個性を脱すること  
で非個性化しようとした。前者は求心的に働き、後者は遠心的にうごいて、よりすぐれたものと同一化しようとした  
ちがいはある。ベイリーが、バイロンとキーツは（<sup>11</sup>）  
「他のロマン派詩人以上に、たがいに密接な関係がある」といったのも、二人の若干のちがいはあるものの深い同質性  
を認めたためであろう。『鈴つき帽子』のなかで、人間の偽善や不正を嘲笑揶揄し、愚かさを喜劇化し、愚弄する  
刃には、鋭いものがある。

## （六）

この風刺精神は、この詩のいまひとつのテーマ〈嫉妬〉の度合をふかめているといえよう。それに拍車をかけているのが、病氣による詩人の〈愛〉の断絶があることも、ほぼ確かである。嫉妬への興味は、キーツのバートン『憂うつの解剖』やアリオストーの愛読（一八一九年九月ごろ）で

かきたてられた。それは、九月十八日の弟ジョージあての手紙に、前者が引用されている点よりも明らかである。バートンによれば、嫉妬は自分の熱愛している相手が他人に奪われはしないかという疑惑、それを自分ひとりのものになりたいという専有欲に発するもので、「あらゆる人間の情熱のなかで愛はもっとも激しく、愛の憂うつのかもす苦い体験のなかで、嫉妬という私生子が、もっとも苦々しいものだ」と定義している。さらに〈嫉妬の治療〉の項では、アリオストーの詩が引用されている。

嫉妬は 非情な心の傷で、その苦痛はいかなるアルコールの力も、こう薬も、星占いもはたまた、偉大なゾロアスタ教の僧侶の発明した深遠な魔術も、癒すことはない。  
嫉妬は、あらゆる良識をおさえるほど、ひとの心と魂を毒する傷であり、また不治といつてよいほど、その苦悩の長つづきする傷なのである。<sup>(13)</sup>

まこと人間は、嫉妬にかられると心の落ちつきをなくして顔面蒼白になり、不安と興ふん、怒りのあいだをばげし

く揺れ動き、そのため憔悴し憂うつに陥る。その恐ろしい心の動揺のため、情炎は燃えさかり、苦痛と怒りのやり場をなくして、目まいのするような狂気にはしる。ひとは、溜息をつき、すすり泣き、愛を誓うかとおもうと、裏切り、中傷し、呪い、けんかし、叱り、自己嫌悪し、自他とたたかう心の修羅場をむかえる。当事者にとっては地獄の状態であるが、この異常な情熱が、すぐれた文学を生むことがよくあるのは、アイロニーである。『鈴つき帽子』も、その一例のようなものである。

エルフィン王の嫉妬は、かなり複雑である。それは作者キーツのペルソナとしての面があり、恋愛面の嫉妬、成功・名誉欲での面の嫉妬というように、〈複合型の嫉妬〉の様相を呈しているからだろう。前者の嫉妬については、王は人間の恋人ヒューバートのいるベラネインを〈呪わしいベラネインめ〉と罵倒し、〈触れることのできない〉王妃に対して、忌々しい嫉妬感を抱いていることは、あきらかである。

王女には人間の恋人がいたと、老臣は明言している。  
そう、偉大なエルフィン王に嫁いでくるまえ、恋人の

まわりを飛びまわり、へつらい、いちゃついていたと。結婚後もなお、夫といっしょにいるのを悦ばず、アングラランドに逃げのびたいと、思いめぐらしたと。そこには、王女のやさしい胸をいため悩ませた若者がいて、その熱い情熱はおそろしく燃えあがり、<sup>(74)</sup> 姫の脇腹にあてた手を、恋情で焼きこがすほどだった。

あわれ！ エルフィン、情けないことに、王はただ座って、その肌にも触れられない花嫁を、呪うのだった。<sup>(75)</sup>

名前ばかりの花嫁の冷たさと反比例して、人間娘へ愛しいバーサへ<sup>(76)</sup>の妖精王の思慕はげしく、思うようにあえない焦燥と嫉妬は、いやすばかりである。

やがて、約束どおり婚礼の使節が鳥のように飛びたち、市外の森のむこうへ消えざると、王は恋のするどい矢に胸を射ぬかれて、いらいらしてつぶやきながら、美しい女王蜂から閉めだされた雄蜂のように  
私室へ引きさがり、むしゃくしゃして<sup>(77)</sup>  
身体をソファのうえに、投げだした。

エルフィン王は、自分の財宝と高価な酒、いや王妃を代償にしてまでも、魔術師ハムと取引をして、人間女を手に入れようとする。それを可能にするのは「むかし」の伝説の本の魔法である。この本は、王に噛みつきもしないし、アラビアン・ナイト『賢人ズバンの話』(第四夜)のなかの復しゅうの毒液をぬった本のように、王を殺しもしない。ただ愛する人間女バーサを失神させるだけの「効能のある魔法の本」である。残念ながら『鈴つき帽子』は中断しているので、実効があったかどうかは詳らかではない。

ただこの手段にたよるまで、王の恋は切迫した嫉妬まじりの狂恋であったことだけは確かだろう。伝記的なことにはあまり触れたくないが、この狂恋と嫉妬こそ、一八一九年終りから一八二〇年ごろにかけての、キーツの支配的感情であったことは否めない。キーツ詩にかくれた深い意味をさぐるには、評論集のないこの詩人の場合、C・E・マニーをまたずとも、かれの『書簡集』に目をとおすのがいちばんである。嫉妬の手紙は、恋人ファニー・ブローンと識り合ってからまもなく、自分の心の自由を奪った17歳の少女への愛のうらみ、つらみからはじまっている。それほど、この社交好きの当世風の美女にふかく惹かれたらし

い。これは現実の少女の実像と、理想像につくりあげられた虚像のファニーの衝突があったのであろう。むかしヴェニス<sup>(7)</sup>の街角で、暗い地下牢に閉じこめられた人々のうらみの訴状を呑みこんだヘライオン像<sup>(8)</sup>、憎悪の告発状を受け入れた偶像に自分をたとえて、パーティー好きの恋人にこういつている。「さあ外出して、ティー・パーティーで、きみの容色をしぼませ、夕食会で凍らせ、舞踏会で黒く焼き、やじ馬集会で煮つめるがよい。ぼくを信じてくれ、もっと高尚な娯楽をきみに見つけてあげるから」。

かれのいう『高尚な娯楽』は、残念ながらこの明るい現代少女には通じなかった。ファニーは、キーツの天才を認め、むしろ協力的でもあったが、肺結核におかされたこの病的な、異常に神経の鋭敏なキーツには、理解できないファニーの行動があった。

この一カ月、どのように過されましたか。だれといっしょに笑い興じたのですか。……まだ舞踏会や、ほかの社交場でいままで見かけたように振舞っていられるなら——ぼくは死んでしまいたい。そんな振舞いをされるなら、こよいかぎりですんだほうがましだ。きみなしでは生きてはいけない。貞淑なきみ、操正しいきみなしには。日はのぼり、また沈み、一

日はすぎていきます。日がな、ぼくの胸のなかを流れる悲痛な感情の深さは、わかつてもらえないでしょう。<sup>(79)</sup>

自分たちの愛を神聖な秘めごととしたかった詩人にとって、社交場で自由に振舞い他人と談笑するフアニーは、この愛をゴシップ好きの連中の笑いもの、嘲笑の種にしようとしているのではないかと邪推する。恋人の心がわり、変節を心配し、悲壮な気持で愛に限界のないこと、とどめる術もない愛だと告白、恋人を愛の信仰の女神として、みずからをその愛の殉教者にみたてようとする。こうした愛の苦悶をみせつける詩人は「あれこれの人間がぼくの怠惰と軽率とにあぎれている」ことを認め、一夜、愛の懊悩で憔悴してみじめな状態になる。しかし翌朝は気分が回復して、すこし創作するが、また憂うつに陥るという、陰と陽、心のはげしい「うつ」と「躁」をくりかえす。キーツはこうした極端から極端への精神的激変をおさえる一工夫として詩作へ没頭する。こころを蝕む嫉妬から逃れる道として〈創作の想像的なよろこび〉<sup>(80)</sup>をえらぶのである。しかし、結果はおなじで不安な愛の動搖にゆきまわれ、〈賽をなげて、死か愛をえらびたい〉という愛・死の二者択一的な悲

壮感をしめすのである。『鈴つき帽子』前後の作品をみると、こうした嫉妬と愛の基軸構造のパターンがよくみられるのも、ふしぎではない。まえに引用した花嫁オーランテを部下に奪われて狂乱する『オットー大帝』のルドルフ王子、「きみの慈悲こそほしい」のソネットの愛の絶叫、そして恋人を専有したいという切なる愛情を吐出した『フアニー』(オード)も、みな共通の因子をふくんでいるようだ。

いったいだれが貪欲な目でおれの宴の女を

喰べつくすのか。だれがまじまじとおれの白銀の月を

みつめるのか。ああ、せめて、あのやさ手を奪わないでくれ。

.....

愛する女よ！ きみの心を大切にしまつて、おいておくれ、

たとえ淫<sup>みだら</sup>な夢をさそう音楽が、夏空に流れても。

.....

恋、恋だけが、おおくのはげしい苦悶にみちている。

最愛のひとよ、この心さいなむ嫉妬より

ぼくの心を 自由<sup>(81)</sup>にしてくれないか。

詩人にとって恋人は、シンシアの女神、無上の宴<sup>うたげ</sup>へ神聖な愛の海へ秘蹟のパンというように、宗教的な女神

にまで昂揚された存在であり、崩れてゆく肉体と精神の最後の支えとなるべきものであった。キーツの最後の作品ともいえる『鈴つき帽子』で、このような嫉妬と風刺のテーマが生きているのは、『詩』、『名声』、『愛』に賭けた詩人が、ついにその短い26歳たらずの生涯で、いずれをも確実にできず、死だけを確実にするものと認めたとき、奔流のごとく溢れでたテーマではなかったか。この作品と同時に改作した『ハイピアリアンの没落』のなかで、真の詩人となるために、我欲をすてた無私の愛の必要を悟って、『死んで甦る』転生をした詩人にしては、この嫉妬の利己愛は、矛盾するようにもみえる。しかしキーツにとって、利己愛も無私の愛も、いずれも強烈で純粹であつたために、いつ両者が交替するかもしれない精神的テンションに貫かれていたといえる。逆説的にいえば、この詩人は、人一倍強烈な自我の持主で、それに悩んでいたため、『詩人には自己がない』と非個性論の重要性を説き、つねに自己破壊の作業のなかで、新しい自己を創造しようとしたのである。そして狭い視野に閉じこめられないで、複眼的な目を持ち、できるだけ客観的に公平に、ものをみようとした。キーツの詩によく、矛盾概念の同時併在や両極性が存

在し、かれ自身も人生・芸術の矛盾のなかに身をひそめて、解決を見つける『消極的受容力』の哲学の必要を説いているのも、そうした努力のあらわれといえよう。

『鈴つき帽子』でも『お伽話』という枠組みのなかで、フェアリー・テイルの『両極性』をうまく利用している。登場人物はほとんど妖精にして、一方では愛らしい妖精の華麗な魅惑世界をえがきながらも、もう一方では『お伽話』に仮託して現実の人間世界の凄まじい風刺を行い、ゆがんだ愛の嫉妬を表現している。また『空中飛行』<sup>レヴィティション</sup>の夢をだして、夢物語のもつ矛盾した異質のもの、軽やかさと重さ、喜びと苦悩、善と悪、真実と偽善、愛と憎しみ、深刻と輕妙との対立と調和の問題を、なげかけている。飛行の夢には、パシュラールも説くような異なった二種類のものの弁証法<sup>22</sup>の法則が存在するから、この『妖精』と『飛行の夢』という工夫は、晩年のキーツのひとつの収穫だろう。そこには類似したサウジの『カメラの呪』のパロディ化や、『オペロン』の魔法の空中飛行以上の意味があるとい、ってよい。

こうした『両極性』は、すでにのべたように、『鈴つき帽子』と、それと同時に書き直した『没落』の二作品につ

いてもいえるところである。『没落』では、壮大な詩人の夢の実現を神話の網目をおして真摯に語り、かたや『鈴つき帽子』は、比較的楽な気分分、フェアリー・テイルの枠組みをかりて自由奔放に人間社会をパロディ化した。前者は、詩人の同一性をもとめての苦悩の精神的探求の記録であるが、後者は妖精のペルソナをかりて、抑圧された自己のすべてをさらけ出し、風刺的だが、コミカルな愛——いやその裏がえしの強烈な嫉妬のテーマを、赤裸々に提起した。いっけん、深刻と軽妙のコントラストがあるようだが、それぞれ反対の極のものを、その作品の背後にふくんでいるため、相通するものがある。夢の探求でも、詩人の夢と愛の夢がそれぞれ探求され、共通するものがある。また、この両作品が表裏関係にあるといったのも、創作時期だけの問題でなく、この意味がある。

ヴァレンスによれば、「人間はいつも必然的に自己の外に、事物に近く存在することによってのみ、彼自身の身近に存在し、彼自身となる」<sup>(83)</sup>という。この実存主義的解釈によれば、人間は自分を離れた非我、他者の把握の側面にたつとき、自己を真に意識し、認識することになる。もともと我流に解釈すれば、自己を、世界・他者との関係でとらえ

て、それと一体化し、客観化するとき、はじめて自己が発見できるということになる。

つまりキーツは、その世界が悲劇の世界であれ、深刻なオードや伝説的バラッドの世界であれ、このような妖精詩の世界であれ、その世界の住民と自己をアイデンティファイすることに、自己を再発見し、表現し、また自己をふくむ社会そのものをも、再認識しようとするのである。

いってみれば『鈴つき帽子』のなかのエルフィン王も、ベラネインも、クラフティカント、ハム、いやバーサさえ、そうした自己の一部であり、分身であることとみることが可能になる。シュールリアリズムも、実存主義も、ロマンチズムも、その方向はちがっても、ある本質的な部分では、ふしぎな符合点がみられないだろうか。自己を夢の世界であれ、他者の世界であれ、ことばの生まれるまへの実存状況であれ、そうした世界に自己を解放し、客観化することにより、逆の視点から自己そのものを発見し、認識できる。つまり自・他同一性をもつことにより、個人的なものを、全体的なものに普遍化できるのである。「思うにキーツは、もともと個人的で、もともと内密な官能<sup>センシティブな官能</sup>を、偉大で荘厳な人生観・自然観に普遍化してしまう」とベイリー<sup>(84)</sup>



のいうとき、キーツの個人的官能すらも、万人に共通の普遍性と恒久性をもちうると示唆しているのだろう。生命が燃えつぎるまえの肉体的・精神的極限状況のなかで、妖精詩という新ジャンルに挑戦したこの作品こそ、新しい自己をかぎりなく求めつづけた、プロメテウスの人間キーツの重要な作品といえよう。まったく孤独な絶望的状況にあっても、未完成であれ、死と対決して、このような問題作をつくりえた点に、つねに新しい詩的視野をもち、芸術的世界を開拓し、創造しつづけたキーツ詩の普遍性と永遠性を、みるおもしろいとする。

# 注

- (1) アハムール・ンガン『夢と詩』。アンゼン・ブルマン『夢の軌跡』(国文社、1970) 16頁所収。
- (2) W. W. Beyer: *Keats and the Daemon King* (Oxford, 1947), p. 268.
- (3) W. J. Bate: *John Keats* (Harvard U. P., 1963), p. 622.
- (4) John Jones: *John Keats: Dream of Truth* (Chatto and Windus, 1969), p. 151.
- (5) Sidney Colvin: *John Keats* (Macmillan, 1920), p.

446.

- (9) Gabriel Rossetti's remark quoted in H. B. Forman (ed.): *The Complete Works of John Keats*, Vol. III (AMS Press Reprint, (1901) 1970), p. 187 n.
- (7) E. De Sélincourt: *The Poems of John Keats* (Methuen, rpt., 1954), p. 560.
- (8) Dorothy Hewlett: *A Life of John Keats* (Hurst & Blackett, 1937), p. 281.
- (6) Amy Lowell: *John Keats* (Houghton Mifflin, 1925), II. p. 373.
- (10) C. L. Finney: *The Evolution of Keats's Poetry* (Harvard, 1936; Russel & Russel, 1963), Vol. II, p. 567.
- (11) Letter of Charles Brown to R. M. Milnes, 29 Mar. 1841. Charles A. Brown: *Life of John Keats*, ed. by D. H. Bodurtha & W. B. Pope (Oxford U. P., 1937), p. 35. 所収。
- (12) Katharine Briggs: *The Vanishing People—Fairy Lore and Legends*—(Pantheon Books, 1978), p. 123.
- (13) Jack Stillingier(ed.): *The Poems of John Keats* (Harvard U. P., 1978), p. 504.
- (14) Stillingier: *ibid.*, p. 628 f.

- (51) Miriam Allott (ed.): *The Poems of John Keats* (Longman, 1970), p. 700.
- (56) A. Lowell: *John Keats*, II, p. 367.
- (17) Stillinger, *op. cit.*, p. 676.
- (18) Claude L. Finney: *The Evolution of Keats's Poetry* (Russel & Russel, 1963), Vol. II, p. 737.
- (19) W. W. Beyer: *op. cit.*, p. 268.
- (20) Robert Gittings: *The Mask of Keats* (Heinemann, 1956), p. 121.
- (12) Charles Brown: *Life of John Keats*, p. 64.
- 「キーンは、  
「死の警告だ。それはきくがうなく死ぬ」と  
叫んだ。」
- H. E. Rollins (ed.): *The Keats Circle*, II, pp. 73-74.
- 収録。
- (23) C. A. Brown: *op. cit.*, p. 63.
- (23) Letter to J. H. Reynolds, 28 Feb. 1820.
- (24) Letter to C. Brown, 21 June 1820.
- (25) Robert Gittings: *op. cit.*, p. 129.
- (26) Letter to the George Keats, 24 Sept. 1819.
- (27) Letter to J. H. Reynolds, 21 Sept. 1819.
- (28) *The Fall of Hyperion*, I, 16-18.
- (29) W. J. Bate: *op. cit.*, pp. 626-627.
- (30) William Beckford: *Vathek* (English translation by Samuel Henley, 1786) (Oxford U.P., 1970), p. 6.
- (31) Beckford: *ibid.*, p. 4.
- (32) Beckford: *ibid.*, p. 5.
- (33) Beckford: *ibid.*, p. 14.
- (34) Beckford: *ibid.*, p. 13.
- (35) *The Fall of Hyperion*, I, 42.
- (36) Beckford: *op. cit.*, p. 23.
- (37) *The Fall of Hyperion*, I, 308-318.
- (38) *ibid.*, I, 85-86.
- (39) *The Cap and Bells or, The Jealousies*, I.
- (40) *ibid.*, II, 4.
- (41) *ibid.*, XX, 5-9.
- (42) *Vathek*, p. 3.
- (43) *The Cap and Bells*, LXXIV, 3-9.
- (44) *Vathek*, pp. 32-33.
- (45) *The Cap and Bells*, LXXV, 6-8.

- (46) Christopher Ricks: *Keats and Embarrassment* (Oxford U. P., 1974), p. 75.
- (47) *Vathek*, p. 32.
- (48) *Ibid.*, p. 89.
- (49) *The Cap and Bells*, LXXVIII. 7-9.
- (50) ガストン・ベシエラール、宇佐見英治訳『夢と夢』(法政大学出版局、一九六八年) 30頁参照。
- (51) *The Cap and Bells*, XIX.
- (52) Letter to George and Georgiana Keats, 14-31 Oct. 1818.
- (53) *The Cap and Bells*, XVI—XVIII.
- (54) Letter to Charles Brown, Aug(?) . 1820.
- (55) Letter to Charles Brown, 21 June 1820.
- (56) 松浦暢著『キーンズの夢と現実』(東京・吾妻書房) 73〜74頁参照。
- (57) *Can death be sleep . . . ?*
- (58) William Hazlitt: "On the Feeling of Immortality in Youth", *Winterslow* (London: Grant Richards, 1902), pp. 45-46.
- (59) Phillips G. Mann: "Keats's Indian Allegory", *Keats-Shelley Journal*, Vol. VI (1957), pp. 4-9.
- (60) *The Cap and Bells*, XXXVII.
- (61) Letter to Benjamin Bailey, 14 Aug. 1819.
- (62) *Olho the Great*, V. 130-134.
- (63) Christopher Ricks: *op. cit.*, p. 75.
- (64) H. E. Rollins: *The Keats Circle*, II. (Harvard U. P., 1965), pp. 134-135.
- (65) Dorothy Hewlett: *op. cit.*, p. 283.
- (66) Letter to John Taylor, 17 Nov. 1819.
- (67) Letter to James Rice, Dec. 1819.
- (68) Letter to C. W. Dilke, 22 Sept. 1819.
- (69) *Ibid.*
- (70) Letter to George and Georgiana Keats, 16 Dec.—4 Jan. 1819.
- (71) John Bayley: *Keats and Reality*, Chatterton Lecture (the British Academy, Vol. XLVIII, 1962), p. 98.
- (72) Robert Burton: *The Anatomy of Melancholy* (Dent), p. 280.
- (73) *Ibid.*, p. 288.
- (74) *The Cap and Bells*, XIII.
- (75) *Ibid.*, XIV. 8-9.
- (76) *Ibid.*, XV. 1-8.

- (7) C. F. Magny: *Essai sur les Limites de la Littérature* (Paris. 1945), p. 66.
- (78) Letter to Fanny Brawne, 5, 6 Aug. 1819.
- (79) Letter to Fanny Brawne, 5 July(?) 1820.  
松浦暢記『キーンの手紙』(吾妻書房)第五刷 135～136  
頁参照。
- (80) Letter to Fanny Brawne, 10 Aug. 1819.
- (81) *Ode to Fanny*, III. 1-3, IV. 1-2, VI. 6-8.
- (82) ガストン・ハシチャール『聖と夢』30頁。
- (83) A・ドゥ・ヴァレンス「内的生活と行動生活」ポール・  
フールキエ『美存主義』(白水社・一九八二)53頁所収。
- (84) John Bayley: *The Uses of Division: Unity and Dis-  
harmony in Literature* (Chatto & Windus, 1976), p.  
133.